

## わたしの戦争体験記

宗像市 大山 照代

東京に初めてB29の空襲があった時、母は神楽坂に買い物に行き、店屋を出て何気なく空を見たら低空を大きな飛行機が飛んでいて、やがて、バラバラとまるで金魚が糞をするように爆弾を落とした。あら空襲と驚くと同時に空襲警報のサイレンになった。母は、空襲を眼の前に見て、東京は必ずやられると直感し家探しを始めた。三島や小田原辺りまで家探しをしたが徒労だった。

昭和9年4月、私が女学校3年の時東京に引っ越した。戦前の東京は物価が安くて非常に暮らしよい所だった。母は、知人がお金があるので売りたいがっていた土地を買って、自宅と貸家3軒を建てて東京に永住するつもりでいた。

郷里の家は、借家人に値引きして買ってもらったが、家を売ることにしたら、貸家3軒を空家にしたら4軒まとめて買うという人が現れた。事情を話したら2軒は引っ越してくれた。1軒だけは居座って動かなかった。その1軒のため随分値切って売ることになった。家財道具は梱包して新宿駅の倉庫に預けて、いつ出発出来るか国鉄の事情によりわからないということだった。18年の10月15日疎開した。9年間住み慣れた東京に別れを告げた。

郷里の叔父の家に落ち着き、家探しを始めた。私の姉が病身で、食糧事情が幾らか良いらしい郷里で養生してもらうのも疎開の原因の一つだったが、出発の朝、急に病状が悪化して郷里に着いて25日目に旅立っていった。

家探しを方々に頼んで、市内と言っても田舎の小さい中古の住宅を法外な値段で買ったが、借家人が引っ越すまでに間があるので、母と2人で阿久根の温泉に行くことにした。母の知人で、あまり母も好きでないKさんが是非私も同行させてとしきりに頼むので3人で出かけた。

汽車の中で向こう側に1人で腰掛けている農家の主婦らしい人が、網棚に乗せている風呂敷包みをおろして開けて、こちらをちらちら見ながら二段の重箱の蓋を開けて見ては、風呂敷に包んで棚に上げる。何度も同じ事をくり返す。母は重箱の中が見えたらしく、視線があった時「良かったら私達に御馳走して下さい」

「こぎやん残り物でよかったらどうぞ食べて下さい。息子が入営しているので面会に行った帰りです」

一段の重箱にはお赤飯のおにぎりが4個、下の重にはごぼうと里芋のお煮しめが少し入っていた。お赤飯など当時では珍しくて食べられない物だった。1個ずつ食べて本当においしかった。残りの1個は母がKさんにあげたら遠慮もしないで食べた。母は50銭を出して塵紙に包みかけたら、Kさんは大きな声で「残り物だからそんな事せんでもよか」と盛んに手を振る。母は無視して「本当においしかったですよ、御馳走様でした」。重箱の上に紙包みを乗せて渡した。「残り物でちっとしかなかったのに、こんな事してもらったら気の毒です」と言うのに

「気持ちだけだからとって下さい」と受取ってもらった。あの人の息子さん、元気で親御さんの所に帰られたかしらと母と噂しました。

10日間阿久根でのんびりし、帰ってから10日位たって家が空いたので引っ越した。お正月も間近な寒い日だった。母が買い物をして届けてもらうように頼むと、店屋の者が決まったように「東京から来て高う家を買いなはった人ですね」と言うので、「馬鹿みたいに思っているのだろう。家に落着くのが先決だったし、東京の家は築8年で4倍の値段で売れたのだから、不法に高いのは承知で買ったのだ」と言った。

家の売り主が、お餅つきましたからと重箱一杯のあん餅を届けてくれた。本当においしかった。食糧事情は日増しに悪化して、お米代わりの芋も足りない。リュックを背負って農家に買い出しに出かけて芋やカボチャを買いに通った。敷地が広いのでカボチャを植え、庭はカボチャの葉ばかり。手探りで小さな実を見付けるのが楽しみで、母と2人で日に何度も見て回る。下の百姓屋の人達はさぞおかしかっただろうと笑ったものです。初めて野菜の種を買い、植えて肥をかけても全然おいしい野菜は出来なかった。味はどうしてもよくて、食べられたらよい時代だったから。これまで見た事もないようなお魚の配給がある。3軒の農家はきまったようにとらないので、うちが4軒分の配給を貰って、当分の間動物性蛋白質の補給ができました。

ごぼうを、遠いごぼう農家の畑に出かけ、言値の高い物を手に入れたが嬉しかった。帰りに雨戸を建てかけた家の人が出入りしている。聞けば牛肉を売っていると言うので「牛肉も下さい」「高かばい」「かまいません下さい」高価な牛肉をごぼうと煮ておいしい。親子で幸福な気持ちになる。その後何度も行ったが戸は閉めたままだった。

20年になると毎晩空襲、着のみ着のままモンペで寝ているので、防空頭巾をかぶって防空壕に退避する。ある日、防空壕に入るや爆音と夕立みたいな音がした。大阪で焼夷爆弾が落ちたときは夕立みたいな音がしていたと言っていたので、「確かに落ちたから」と私が壕から出ようとする、と、「危険だから出なさんな」とモンペを握って放さない。弾が確かに落ちた音がしたから、初期に始末しなくては火事になるから放してと頼んで外に出る。果して家の左半分の道路際が一面の火。無数に燃えている。濡縁の大きなタライに水を一杯入れているので、バケツにとってざっとかけると火はすっと動いて消火しない。油脂なので、少しづつ水をかけて消さねばならぬ。気はあせるが一つずつ消して行かねばならぬ。母と2人で消火作業。隣家も無数の火の海。母が大きな声で呼んでも、沢山いるのに一人として出てこない。母は消火しながら大きな声で呼び続けたら、やっと主人が出てきて「わあこれは大事。どぎやんしようか」。母が皆出てきて一つずつ水を掛けて消していくように教える。タライの水は無くなり、台所のポンプをおして水を出し消火活動。昼間のような明るさになり、波状攻撃で繰り返し繰り返し空襲を繰り返す。今に弾に当たって死ぬかもと考えた。消火の手を休めることはできない。塀を取り壊していたので遠方からも応援に来てくれたらしい。母は気丈に「水々応援」と言いながら消火活動を続けた。私も力尽きて倒れるかもと思ったが、家を守らなくてはと必死の力でポンプの水を出しては消火活動を続けた。飛行機も来なくなり、ふと気がつくと、農家の藁屋

根が燃えているので、大声を出して知らせる。そこも大事にならずに済んだ。

夜が明けて明るくなった。火もすべて消火できて家に入ると、左側の窓硝子がすべて壊れて廊下は歩けない。靴をはいて掃除する。

「お母さん焼けなくてよかったですねえ」

「あんたが気丈に出て行って初期に消火活動したおかげよ」

掃除が済んで横になった。疲れているのに眠れなかった。一斗牛乳缶位の大きさの油脂焼夷弾がお隣の大便秘槽に落ちていたそうでした。

ちょうど家の上位から低空で空襲するので不審に思ったら、家より50m位先に軍の食糧倉庫があってそこが攻撃目的だったそうだ。10日以上もポンポン缶詰の破裂する音が聞こえた。隣組の3軒の農家は焼けた。いずれも藁屋根が燃えているのに防空壕に入って気がつかなかったためである。

戦後母は、東京に行った時世田谷大原町の住所を尋ねた。見渡す限り焼野原に1軒だけ焼け残った家があり、そこは居座って動かなかった家で、住人も昔の人達だった。気の毒に家を買って下さった人の消息はわからなかった。